

| | |
|--------------|---|
| Title | <書評>島津忠夫著『連歌師宗祇』 |
| Author(s) | 湯之上, 早苗 |
| Citation | 語文. 58 P.46-P.49 |
| Issue Date | 1992-04-20 |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/68842 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

書評・島津忠夫著『連歌師宗祇』

湯之上 早 苗

宗祇伝の近代における研究は伊地知謙男氏の「宗祇」（昭和十八年、青梧堂）に始まる。宗祇伝の骨格、もつと広く宗祇研究の骨格というべきであるが、それはこの書によって形作られたのであり、以後およそ五十年間、後続の研究者にとつて、拠るべき第一の書となつている。もとより、伊地知氏の研究によつても、宗祇の生涯には実状の明らかでない点が多く残されている。

第一に出生地と生いたちをも含めて、連歌師宗祇として世に出るまでの閨歴がよくわからない。第二は東常縁との関係をも含めて、東国における行動の実態が一筋の線になつて見えてくるというところまでいっていない。地方での活動であるだけに、資料は断片的であり、残存資料に見える年次も不確定要素が多い。東国時代は宗祇の修業期でもあり、帰洛後の宗祇の活動の基礎が固まつていく時であるから、宗祇伝の研究の重要部分である。第三に、宗祇が身を置いていた相国寺や堺とのかかわりも十分に明らかであるとは言い難い。挙げれば限りもないが、近年の研究の中に、例えば両角倉一氏の「宗祇の東国下向 その一」（山梨県立女子短大紀要）¹⁴、昭和五十六年三月、「宗祇連歌の研究」（昭和六十年、勉誠社）や、金

子金治郎博士の「宗祇の生活と作品」（昭和五十八年、桜楓社）などがあつて、問題のいくつかに光が当てられている。また、東常縁とのかかわりについても、古今伝受研究の立場からの考察、例えば小高道子氏の「東常縁の古今伝受——伝受形式の成立——」（和歌文学研究）昭和五十六年八月）や、東香里氏の「東常縁から宗祇への古今伝受の時処について」（国文鶴見）⁹、昭和四十九年三月）などがあつて、活況を呈している。この時点において島津氏の宗祇伝研究が一書となつて刊行されたのは、研究の整理総括という意味もあつて、研究者にはたいへんありがたいことである。

さて、著者は題して「連歌師宗祇」という。「連歌師」を冠したのにはわけがあつて、それは「応仁の大乱をはさんで八十二年の生涯を乱世の中に生き抜き、連歌という文芸を大成した連歌師宗祇には、文学に尽くしたなみなならぬ精進とともに、したたかにして周到な生き方があつた。そのいくつかの重要な問題を掘り下げてみようとする……」（同書第一章）ということばに明らかである。また、「宗祇の生涯を省みると、それはまさしく連歌師としての一生であり、世間からも連歌師として遇せられていたことが知られる。

都の公家と地方の大名高家との間をわたり歩く連歌師という生業の典型を作り上げたともいえる生涯であった」(第十三章)ということとはは宗祇を「連歌師」として確認する姿勢がさらに明確にうち出されている。つまり、本書は、宗祇が「連歌師」としての自己をどのように充実させ大成させていったのかという視点からまとめられたものである。

収めるところ十四章と付一、二、三、論考のほとんどは既発表のもの改稿で、書き下ろしではないから、論考にいくらかの精粗があるのが憾みであるが、かねがね深い関心を持って書き進めておられたので、本書は宗祇の全生涯をほぼ覆うものとなり、さらに「宗祇と芭蕉」(第十四章)という、後世の受けとめにまで目くばりができている。どの論考にも、先行研究の丁寧な紹介と批判があり、問題点の抽出がはっきりとしていて、研究者にとってはたいへんありがたいものになっている。問題は多岐にわたり、怠け者のわたくしが批評できるものではないので、紹介のようなかたちでいささかの私見を述べるにとどめようと思う。

第二章の「初期連歌論の成立」から第五章の「宗祇と東常縁」までは東国における宗祇の動静についてのものである。「長六文」・「吾妻問答」の二つが心敬の影響を受ける前、宗砌流の連歌観のものになったものとした上で、心敬と接するに及んで、心敬から厳しい批評を受け、新しい連歌観に目覚めてゆく過程を、「所々返答第三状」を引用して説いている。穏当な見解というべきであろう。第四章「春は江戸辺に」は「東野洲消息」の成立年次と内容についての考察である。諸説ある推定年次を応仁二年としたが、それは今のところまだ推定の域にとどまるにしても、この内容の考察は整然と

して、常縁と宗祇との関係を和歌の面からかなりはっきりと描き出している点で注目すべきものがある。第五章「宗祇と東常縁」も、常縁側の資料、特に地方資料を援用してのものであり、その結果、宗祇はある時期郡上に庵を結んでいたと推定するなど、いくつかの新見を生むに至っている。地方の伝承はその発生の時期もよくわからないことが多いので、扱いが難しい。ここでもその危惧は多分に残っているが、新しい問題を提起したといつてよく、今後の課題として注目すべきではないかと思う。

第六章「連歌師への道」から第十二章「足なうてのほりかねたる筑波山」までは、「新撰菟玖波集」探進に至る過程を、自撰句集や「竹林抄」の編集という面から、あるいは「筑紫道記」の執筆から眺め、宗祇の門弟たちという点から考えたりしている。この中にもまたいくつかの新見がある。「竹林抄」の一人である宗伊に対する宗祇の姿勢は没後において厳しいものがあり、そのことは両角氏の指摘するところであるが、鳥津氏は時の宗匠宗伊を七賢の一人に加えたところに、「時の宗匠賢盛に敬意を表する」姿勢があらわれていて、その辺にも宗祇の政治的配慮があったと見ている。妥当な見解といえるべきであろう。また、基佐については、宗祇との確執があつて「新撰菟玖波集」に一句も入集しなかつたという俗説があるが、これにも検討を加えて、むしろ兼載との間に確執があつたところであろうとしているのも新しい見解で、なるほどと思わせるところがある。

宗祇を「連歌師」という視点から考察する姿勢が、第十章の「宗祇と門弟たち」という論考を生んだかと思う。著者は宗祇とその門弟たちとの関係を宗祇以前の連歌師の師弟関係とは異質なものと考

える。「それは「同宿」「同行」という言葉を好んで用いている態度にもっとも端的に表れているように思うのである」という。また、その姿勢で宗長以下主要門弟の動静を整理している。門弟の育成指導というかたちによって、「まさに連歌師と呼ぶにふさわしい生活の一道が形成されて行つた」とする見解はまことに妥当であるが、欲を言えば、「師」と「門弟」との関係の質についても言及すべきではなかつたかと思う。早く離れていった兼載は別にしても、宗長でさえ、宗祇を「師」とは呼んでいない。「宗祇終焉記」の中でも「宗祇老人」と呼ぶ。宗長が「休を「師」と呼ぶような精神的つながりは両者の間に無かつたといつてよく、一般に、宗祇と弟子たちのつながりは便宜と打算との面が強く、あるいはそこにこそ「連歌師」の師と門弟とのつながりの本質があるのかも知れないと思うのである。

第十一章では「新撰菟玖波集」の「祈念百韻」についての考察が連歌作品の異文発生理由に言及して注目される。なおこの論文、昭和五十二年に「連歌と中世文芸」(角川書店)に御寄稿いただいたもの、本書の「あとがき」で「勉強社刊」となるのは誤りである。第十二章「足なうてのほりかねたる筑波山」で、「新撰菟玖波集」に基佐が「一首も入集しなかつたのは、宗祇と基佐との確執による」という考え方に批判を加え、むしろ、同じ心敬門である兼載と基佐との確執によるのではないかとするのは、兼載という人の私の強さからいってもうなづけるものがある。ただこれは両説ともに資料のないことであるから今後の課題ということになるし、あるいは両説を併せ考えるべきことかもしれない。

第十三章は「連歌師宗祇と和歌」で、連歌師宗祇にとって「和

歌」とは何であつたかという問いを、宗祇の生涯を通して考えようとしている。古今伝受や打聞再興にかかわる動きを検討して、「宗祇にとって、和歌はもともと連歌師としての教養のためのものであり、東常縁よりの古今伝受も、もとはといえば、その権威づけのためのものであつたかも知れないが、それが三条西実隆や近衛尚通への伝受ということで以後の和歌史に大きな意義をもたらすことになつた」という評価は少々厳しいけれども正当な位置づけであろう。与えられた紙面も残り少なくなつたので私見を長々と述べられないが、宗祇は自分の連歌の風体の源をどこにおいていたのであろう。島津氏のいうように、「宗祇の正風意識は、二条家の歌学にまさしく準拠している」ことはまちがいないが、宗祇はその源を俊成あたりにおいていたのではないか、「正風体」の和歌も俊成が三十六首で最も多いのであるから、宗祇が正風体を重視したということは、二条とか冷泉とかの対立を超えた所に源を求めていたのではないかと思う。「宗祇終焉記」文龜二年元日(宗祇八十二才)の「二首の歌」

・此の春を八十にそへて十とせてふみちのためしや又も始めん 宗長

・古のためしに遠き八十だに過ぐるはつらき老のうらみを 宗祇
は明らかに俊成九十の賀を念頭にしているもので、そういうことと共に、宗祇の俊成観の研究が必要であらうと思う。(この歌、金子博士の「宗祇旅の記私注」でも、岩波新古典文学大系「中世日記紀行集」の脚注でも「古のためし」を七十の古希のことと解するのは不審)。

愚見を述べた。失考・偏見もあるかと思うし、何よりもこの著書全体を覆うものではないと自覚している。先にも述べたように、

宗祇の生涯の研究としてはまことによく配慮が行き届いており、宗祇伝研究の問題点を的確に指摘し、綿密な考察を加えたもので、後学を裨益するところの大きい好著である。(一九九一年八月二八日刊 四六判 三一〇頁 定価四、四〇〇円 岩波書店)

— 広島文教女子大学教授 —